

教室で読む吉橋通夫「さんちき」

—— 衝撃的結末のその後は絶望か希望か ——

堀口勝裕

○ はじめに

吉橋通夫「さんちき」は短編集『京のかざぐるま』（岩崎書店、一九八八年六月、二六頁―四二頁）に収録されている作品である。一九九三年には東京書籍『新しい国語1』に採録され、それ以降、現在に至るまで三〇年近くの長きにわたって多くの中学一年生が国語の授業の中でこの作品を読んでいる。

そんな「さんちき」の主題に目を向けてみると、教師用指導書（二〇一六）には次のように記されている。

（この作品のテーマの）一つは、三吉の生き方に対する考えの変化である。半人前の三吉が親方から初めて任された仕事は、一本の車の矢を作ることだった。名前の彫り込みを間違えたりもする慌て者だが、親方は必死で作った三吉を認め、職人の心構えとともに、自分たちの仕事のすばらしさや三吉の輝かしい未来を語って聞かせる。それを聞いた三吉は、車大工としての自覚と未来への希望を明確にするのである。

また、渡邊美雄は次のように述べている。

子どもたちにとって、幕末という時代に対する戸惑いはあるが、自分たちと同じ年頃の三吉が失敗を通して、自らの生きる進路を見つけているという筋立ては興味深く読める¹⁾。

さらに、『京のかざぐるま』の解説において後藤竜二も、この短編集の主人公に共通する要素として、「人として生きぬこうとする強い意志と、ゆるぎない人間信頼の情があふれていること」、「無残な事件が相次ぎ、世の中がどうなっていくのか、何を信じればいいのかもわからない。そんな乱れ切った世の中で、なお、凜として生きぬこうとする人々の姿が、とてもあざやかに描かれている」ことを指摘し、主人公たちが「自分の手でさわってたしかめられる仕事を通じて、人と交わり、自分を見つめて、生きぬく力を育んでい」くと記している²⁰。

これらの評価を見ると、「さんちき」は三吉の成長をめぐる物語、いわゆる成長譚として位置づけられていることがわかる。指導書に「生徒は三吉と同年代である。時代は違っても三吉の人間味あふれる言動に共感し、優れた車大工『さんちき』になろうと決心する彼の姿からは、今後の生き方を考える契機を得るにちがいない」とあるが、主人公の三吉に生徒たち一人ひとりが自分を重ね合わせることによって、幕末同様、先行き不透明な現代社会を力強く生き抜いていく力を身につけてほしい。そんな道徳的とも言える願いが、この作品を教科書に掲載する推進力となったのではないだろうか。

たしかに「さんちき」はそこに描かれている事柄だけを捉えて解釈すれば、これからの時代を担う生徒たちにとって、理想的な教材と言えるかもしれない。いつもなら親方の言うことを「半分も聞いていな」かった不真面目な三吉が、車の製作を通じて職人としての心構えを諳んじ、ついには「さんちきは、きつとウデのええ車大工になるで」と宣言して幕を下ろすのであるから、まさにそれは理想的な成長と言えるであろう。

しかし、作中に「物騒だ」という言葉が頻出すること、さらには「このごろ、京都の夜はこわい」と幕末の京都中心部の歴史的な背景が描かれていることから考えると、三吉を物語の世界に閉じ込めたまま、その成長を言祝いでいて良いのだろうか。この作品を史実から切り離し、〈閉じられた世界〉として読むことは必ずしも適切な読解とは言えないのではないだろうか。むしろ、三吉の存在を史実の中に位置づけ、〈開かれた世界〉に存在する一人の人間として捉えたいうえで、この物語を意味づける必要があるのではないだろうか。

そこで、本稿においては、幕末京都の歴史的背景をふまえることによって、一体どのような解釈を導き出すことができるのか。また、その新たな解釈によって、読者のイメージする「さんちき」の世界がどのように変わるのか。この点について論じていくこととする。

一 弟子という存在

三吉が弟子入りした車伝は、その名の通り車を作るお店である⁵³。しかし、「こんだけ大きな車をつくることは、一生に、なんべんもあらへんしな」という親方の発言からすると、山鉾の車ばかりつくって生計を立てていたわけではなさそうだ。「京都は伝統的な車の生産地であり、牛車【乗用】が牛車【貨物用】に変わっても、その生産をつづけていた⁵⁴」とあるから、車伝では普段、牛車や大八車などの荷車を作っていたのであろう。

そんなところへ弟子入りした三吉は、一体どのような生活を強いられていたのだろうか。まずは、三吉の年齢から確認していきたい。三吉は「八つ」のときに、この『車伝』にでしりして、まだ五年」とある。ということは、つまり、まだ半元服すら迎えていない年齢にあるということだ。それにもかかわらず、すでに五年間も弟子としての生活を続けている。

「八つ」と言えば、女の子であれば七五三のお祝いがあるが済んだばかり、現代でも小学校一年生程度の年齢である。そう考えると、三吉の弟子入りはずいぶん早かったと考えられるのではないだろうか。一般的な職人の弟子入りについて、遠藤元男は「法制的にとくに規定されてはいないが、一般的には一才から二三歳くらいの間であった。一七世紀の初めの京都の大工の間では、十二、三才であった。一九世紀後半では、大体において一〇才から一六歳というように幅が広がられている⁵⁵。」と記している。

NHK連続テレビ小説のおしんは、数え年七歳で奉公に出されている。三吉よりもさらに一年早いとはいえ、おしんを奉公に出そうとする父親に対して、母と祖母はおしんがまだ七歳であることを理由に反対していた⁵⁶。

江戸時代において、通常、弟子入りは十歳以降であったのであれば、「八つ」で弟子入りというのはやはりずいぶん早かったと考えられるだろう。そうだとすると、三吉はおしん同様、かなり貧しい家の生まれなのかもしれない。

それでは「八つ」のときに「五年」間、三吉はどのような生活を強いられていたのだろうか。

徒弟の労働のうち、その初めは仕事に関することよりも、家事労働の比重が大きかった。家事労働には水汲み・飯炊き・庭掃き・風呂焚き・子守り・使い走りなどがあつた。仕事に関することといえば、道具の整備や材料の運搬や簡単な初歩の仕事と道具の使いかたといったものであつた。いわば下働きである⁵⁷。

たしかに、親方は山鉾の車を作る際「半人前の三吉にも、手伝ってもらおか」と言っていた。日常的に三吉が仕事の手伝いをしていたのであれば、こんな発言をするはずがない。つまり、三吉はこれまでの五年間、車大工としてのまともな仕事に携わることはできず、家内の雑用をはじめとした下働きばかりさせられていたということになる。

しかも、徒弟の待遇は決して恵まれたものではない。「親方は徒弟に対して、技術指導をし、食事・衣料を施し、若干の給銀（小遣い）をやり、年に二度（正月・七月）の休暇（いわゆる敷入り）を与えなければならなかった」とある。これを三吉に当てはめて考えると、ここまでの五年間に關して言えば、ほとんど毎日下働きに従事させられていたにもかかわらず、「若干の給銀」しか与えられていなかったということになる。

そうであるならば、一三歳の三吉が親方の言うことを「いつもなら半分も聞いていない」というのも納得できる。年端もいかないう少年が、職人の家に弟子入りしたにもかかわらず、日々雑用ばかりを押しつけられ、そのうえ口うるさく叱られるのだ。そんな毎日が五年も続けば、お小言をいちいちまじめに聞くはずがない。

一見すると三吉は、不真面目な弟子であったようにも受け取れる。たとえばそれは、親方に怒鳴られたとき、いつも「ひょこっと首をすくめ、いかにもすまなさそうにうなだれ」、「しょぼりしている」ふりをするような姿にも現れている。しかし、たった一本の矢の製作であっても、「でしりりしてからはじめて必死でやって」おり、このときは「親方のこまかい注意もまじめにきい」ているということからすると、三吉の不真面目とも取られかねない態度は、下働きに関する注意を受けたときのものであったということになるだろう。

遠藤は「初めて道具がもてるというのは、長い苦しい年季勤めをやりとげたからである。それだけに、そこに喜びがあった。堪え抜いたからである」と記しているが、『おらも、いっしょにつくったんやで！』とそこらじゅう走りまわってさげびた⁹くなっているのも、自分のつくった「一本の矢が、白くかがやいてみえた」のも、すべてはそうした苦労があったからこそのことであったに違いない。「親方のこまかい注意」を「いつもなら半分もきいていない」からといって、三吉が不真面目な人間であったということには決してならないのだ。

むしろ、「徒弟にしても、脱落していったものもかなりあった¹⁰」ような過酷な状況下で、三吉は五年間、脱落することなく弟子としての役割を果たしてきた¹¹。その一方で親方は、弟子である三吉に対して、自身の責務を果たしてきたと言えるのだろうか。

徒弟制度においては、弟子ばかりでなく、親方にも義務があった¹²。遠藤は以下のように指摘している。

親方は年季中に一定の技術的階梯を踏んで徒弟に技術を伝達した。そのほかに、徒弟に対して職人にふさわしい倫理と基礎的な教養の育成が義務づけられていた¹³。

「職人にふさわしい」「基礎的な教養」のひとつが、読み書きであったことは論を俟たない。輪島塗の職人であった正門家において、子弟教訓の書として用いられていた「塗物往来」にも、以下のように記されている。

扱又大黒講之掟書、嚴重相守可知我分限也、奢者不久、可恐天道義第一也、酒奕色者為無用、書学算術之無執行者、難成立身者也、仍而雜書如件¹⁴

(さて、また大黒講の掟書、嚴重に相守り我が分限を知るべきなり、奢る者は久しからず、恐るべき天道の義第一なり、酒奕色は無用となし、書学算術の執行無き者、立身なりがたきものなり、よつて雜書件の如し)

「書学算術之無執行者、難成立身者也」とあるとおり、職人であっても「基礎的な教養」は当然必要であった。ところが、周知の通り、三吉は「字には、あまり縁がな」く、「ひらがなで自分の名前の、さんきちとだけは、どうにか書ける」というありさまだった。しかも、親方が漢字で日付を彫っただけで「へえー、親方は学があるんやね」という反応を示してしまっている。親方自身が認めているとおり、三吉は「だれでも知っている」ことすら知らないのだ。

遠藤が「こうしたことが義務づけられてきていることは、親方にも弟子にも、不適格なものがあらわれることがよくあったということを反映させたものであるとみななければならない¹⁵」と指摘しているとおり、あえて「職人にふさわしい倫理と基礎的な教養の育成」が義務づけられているということは、裏を返せば、弟子に対する教育を怠る親方が少なからず存在したということを示している。ほかならぬ車伝の親方もその一人だったということになる。

さらに、遠藤は「徒弟は寺小屋で読み・書き・算盤などを学んだものやそうでないものもいた¹⁶」と述べているが、三吉は間違いな

く寺子屋にも通っていない。それならば、読み書きについては本来親方が教えなくてはならなかったはずだ。乙竹岩造は「算術は専門の師匠があつて教へただけでなく、又寺子屋で教へただけでなく、商家店舗では必須の技術であつた爲、番頭が丁稚小僧に業務の餘暇これを教へるといふ風は、京都・大阪にも江戸にもあつたのである¹⁷⁾」と言っている。

乙竹が指摘しているのは商家の丁稚奉公に関することであるとはいへ、職人にも「基礎的な教養」が求められていたのであるから、寺子屋に通っていない以上、三吉に読み書きを教えるのは親方しかいない。しかも、「寺小屋は七、八歳から一四、五歳までのものが入っていた¹⁸⁾」ことからすると、一三歳の三吉はすでに寺子屋での教育を終えるような年頃である。まさかこれから寺子屋に通わせるということも考えにくい。

そればかりではない。乙竹によれば江戸の「寺子屋児童の総数は、当時の推定学齢児童数の約八割六分強に当る¹⁹⁾」と推定している。さらに、以下のような分析もある。

北桑田郡（京都府）のような僻すう山村でも、幕末明治期には、男児五六%、女児一五%のたかい寺子屋就学率をもっている。しかも除数は、人口増加をみ、しかも就学年限のながい現在（昭和二六年）の小学校児童総数である。だから寺子屋の就学率は、実際はさらに高いものとなり、男児は七〇%を下らなかつたであろう。そうすると、就学児童の身分は、最下層の木樵、小作人を除く凡ての身分となるであろう²⁰⁾。

網野善彦も以下のように指摘している。

江戸時代は、このような文字の庶民への普及を前提として、国家体制ができ上がっています。江戸幕府は当初から、町や村の人たちの中に文字が使える人がいることを前提にした体制だといってよいと思います。この国家はそのような点で、おそらく世界の中でも非常に特異な国家だと思えますけれども、それはこのような、文字の人民への普及度の高さに応ずる問題だと思ふのです²¹⁾。

寺子屋の就学児童に関する推定がどこまで正しいかは疑問の余地が残る。とはいえ、幕末において決して少なくない数の子どもた

ちが寺子屋に通い、識字率がそれなりに高かったということが事実であるならば、読み書きすらまともにできないということが、いかに悲惨な状態であるかということがわかる。こんな状態のまま、三吉が一人前になれるはずはない。

先にも記したとおり、一人前として認められるためには職人としての技術はもちろん、「社会人としての教養や常識も身につけていなければなら」ず、「もし、この両面が備わっていないければ技術的に一人前であっても、人間的には半人前にも及ばないものであった²²」。遠藤も認めているとおり、「こうしたことは理想的なことで、技術面の修練に比重がおかれて人間性の陶冶がおろそかになっていったことは、事実としてみとめなければならぬ²³」のかもしれないが、たとえそうだとしても、「ひらがなで自分の名前の、さんざちとだけは、どうにか書ける」というのは、あまりにもひどすぎる。

言うまでもないことだが、親方自身は日付ばかりでなく、車伝を切り盛りしていくうえで必要とされる「基礎的な教養」も身につけていたはずだ。そうでなければ、親方としてふるまうことなどできない。一方で、三吉は「字には、あまり縁がな」く、「ひらがなで自分の名前の、さんざちとだけは、どうにか書ける」というありさまだった。

もちろん、技術があつて、読み書きができれば将来が約束されるような、そんな生やさしい時代であつたわけではない。当時の社会状況においても、一人前として認められたからといって、独立して親方になることは非常に難しかった。この点について、遠藤は以下のように述べている。

封鎖的で狭隘な市場を少数の親方層で独占的に支配することによって、わずかに維持されていたといえる手工業の封建的生産関係を防衛してゆくためには、できるだけ低廉な徒弟労働力を確保し、しかも、かかる徒弟労働力が短期間のうちに高価な手取取（職人）労働力に上昇しないように、徒弟に対する規制をきびしくし、さらに親方層の員数を制限して、競争相手の出現を抑制し既得の権益を擁護する必要があつた。こうした当面の目的を達成する手段として、徒弟制が整備・確立されたのである²⁴。

株仲間など、特権の支配した近世社会において、親方権は「世襲され、しかも、その数は一定していた²⁵」。したがって、「徒弟奉公を勤めあげて所定の義務を履行し一人前の職人となった徒弟（弟子）層が親方層にまで上昇することのできる途はかなり狭く²⁶」、親方になることができるのは「親方の子息か、あるいは好機と財力に恵まれて親方株を譲り受けるか買い取るかできた一部のものだけ

であ」った。そのため、多くの職人たちは手間賃をとって一時的に雇われる中間層の職人（手間取）として「元の親方か、その紹介でほかの親方の助職人として雇用されるという立場におかれていた²⁷⁾」のだ。

こうした職人たちにも「近代以前では、手工業生産に対する需要は高く、一般的に職人の仕事はたくさんあった²⁸⁾」のかもしれない。しかし、まもなく明治時代がやってくる。新政府は殖産興業政策を打ち出し、機械化による大量生産を進めていく。商業資本がものを言う時代の到来により、三吉のような手工業を生業とする職人の立場は、否応なく厳しいものとなっていかざるを得ない。そんな状況の中で、読み書きすらまともにできない三吉に明るい未来が待っているとは到底考えがたい。もちろん、その責任の一端が親方にあることは言うまでもない。

三吉が立派な車大工になるためには、少なくとも「基礎的な教養」は身につけておかなければならないはずだ。三吉に「学があるんやね」と言われた親方は「あほう、これぐらい、だれでも知っとるわ」と冗談めかして応じているが、三吉の将来を考えたととき、この状態を放っておいた親方の罪は重いと云わざるを得ない。

二 「三吉」との決別

半人前ながらも、ようやく車大工職人としての仕事に携わることができた三吉にとって、名前を彫ったあの晩の経験は一体どのようなものであったのだろうか。

そもそも、なぜ三吉は名前を彫ったのか。それは「車大工は、自分の気にいった車がつくれたとき、名前をそっとほっておく。だから三吉もほることにした」とあるとおり、職人としての慣例にしたがったものであった。三吉はたとえそれがたった一本の矢であったとしても、立派な車の製作に自分も携わることができたことがよほどうれしかったのであろう。

しかし、三吉はまだ半人前だ。堂々と名前を彫ることのできる立場にはない。とはいえ「きょう、親方とふたりでつくりあげた祇園祭りの銚子の車」とあるとおり、車はすでに完成してしまった。祇園祭の開催も間近に迫っている。場合によっては、明日にでも納品先に運ばれてしまうかもしれない。そうだとすれば、名前を彫るチャンスは今晩しかない。そのため、三吉は「親方とおかみさんがねてしまうのをまって夜中にそっとおきだして」彫らなければならなかった。

やると決めたからにはのんびりとはしていられない。物騒な京都で明かりを灯し続けることは危険だし、何よりも親方が起きてきてしまったら計画が頓挫してしまう。できる限り早く彫り終えなくてはならない。そんなふうな気持ちばかりがあせる三吉は、あるうことか自分の名前であるにもかかわらず、本来「き」とするべき三字目を「ち」と間違えて彫ってしまったのだ。

この点をとらえて指導書では、三吉を「名前の彫り込みを間違えたりもする慌て者」と指摘しているが、この彫り間違えてしまった「さんちき」という名前こそ、ほかでもないこの物語のタイトルである。そうであるならば、この名前の彫り間違えには三吉の人物像を示すにとどまらない、もっと大きな意味があると考えることができのではないだろうか。

この点について考えるために、まずは「三吉」という呼称に注目したい。当時の慣習によれば、弟子入りから五年ほど経つと半人前とみなされ、「改めて本名の頭文字を取って、これに〈吉〉あるいは〈松〉の字をつけて呼ぶのが常であった²⁹⁾」ようである。まさに三吉は半人前であったから、この呼称は本名の「三」に半人前を示す「吉」を付したものだということになるだろう³⁰⁾。

ところが、三吉はその半人前であることを示す自分の名前を「さんちき」と彫り間違えてしまったのだ。しかも、親方に指摘されるまで、三吉は自分の過ちに気がついていなかった。それゆえ、三吉は親方に「それに、こりや、まちがえとるやないか」と指摘され、初めて自分の過ちに気がつき、大きな衝撃を受けて「しょんぼりとうなだれ」ることになったのだ。

親方に怒鳴られるとき、いつも三吉はしょんぼりとうなだれているそぶりを示し、ほとぼりが冷めるのを待っていた。しかし、このときは本当に落胆してしまっている。このときの三吉にとっては、それくらいショックの大きな過ちだったということだろう。

三吉は「ち」の字を手でゴシゴシこすってみたり、親方に「どないしたらええやろ」と泣きついたりするが、親方の言うとおり「一度ほりこんだ」ものは、「車がなくなるまで消え」ない。それを知った三吉は、直前まで「ほってしまえば、こちらのものだ。なんぼ親方がどなっても消えることはない」と強気の姿勢を見せていたにもかかわらず、すっかり名前を彫る気力を失ってしまう。名前を彫ることをとがめるに違いないと思われた親方が、意外にも「よしっ、残りをさっさとほってしまえ」と言って背中を押してくれても、三吉は彫ることをためらい「おろおろ」するばかりだった。このときの三吉にとってこの過ちは、取り返しの付かない失敗にはかならなかった。

しかし、ただの失敗に過ぎなかったはずの「さんちき」という刻まれた四文字が、親方の手によって新たな意味を帯びていく。そのきっかけを与えたのが、斬られた侍の姿であった。親方は死ぬまぎわにもかかわらず、憎しみでいっぱいだった侍の目を思い浮か

べながら、侍と自分たち職人を比較しつつ語り始めた。その親方の言葉によって、「さんちき」という名前に新たな意味が与えられていくのだ。「さむらいに生まれんで、よかったな」と静かに言った親方は、「さむらいたちは、なんにも残さんと死んでいくけど、わしらは車を残す」と語り、百年先の人々に思いを馳せる。

この車は、もちろん生き残って、祭りのたびに、大勢の見物人の前をゴロゴロひかれていく。ほいで、だれかが、いまわしらのほった字をみつけるんや。みつけて、こないにいうやろ

ほう、こりゃなんと百年も前につくった車や。長もちしとるなあ。なにに『さんちき』か……。ふうん、これをつくった車大工やな。ちよつとかわつた名前やけど、きつとウデのええ車大工やったんやろなあ……

親方のこの言葉を聞いた三吉は、「親方——。」と言いながら「親方のこしをぎゅっとおし」ている。三吉は「ウデのええ車大工」と言われてうれしかったのと同時に、彫り間違えてしまったことを蒸し返されてしまい、気恥ずかしさを覚えたのであろう。

しかし、親方のこの発言があったからこそ、三吉は最後の場面で「さんちきは、きつとウデのええ車大工になるで」とつぶやくことになる。彫り間違えたことに気がついたときには肩を落としていた三吉も、親方の言葉に勇気づけられた結果、むしろ「さんちき」として生きていくことを受け入れたのだ。

この「ウデのええ車大工」「さんちき」の証こそ、親方とともに二人で作り上げた山鉾の車にはほかならない。いわばこの車は、腕の良い車大工さんちきのよりどころとなる存在となったのだ。

親方の言うとおり、侍たちは「国のためやとかいうとるが」、結局のところ「なんにも残さんと死んでいく」。しかし、この車は三吉が死んだあとも、荘厳な姿のまま人々の前に立ち続け、「さんちき」という名大工がいたことを後世に知らしめてくれる。三吉が最後につぶやいた「さんちきは、きつとウデのええ車大工になるで」は、そんな未来に思いを馳せるなかで口を突いて出た決意の言葉であった。「さんちき」は後世の人々にも認められるような立派な車大工になる。そんな決意を込めて、自分自身のことをあえて「さんちき」と呼んだに違いない。

ところで、三吉が「さんちき」を名乗ることは、いったいどのような意味があると考えられるだろうか。名前について、市村弘正は「名前は物事の誕生（創造）および変身（再創造）をもたらし^{*31}」と指摘している。つまり、三吉は自分自身を「さんちき」と名付けることによって、新たな自己の誕生（創造）、三吉から「さんちき」へと変身（再創造）したということになるだろう。

日本人の古来の習慣として、一生の間に名前を何度も取り替えるということがある。現在でも歌舞伎や落語の世界では、襲名の文化が残っている。商家においては所有権を示すという意味合いから、主人の名前を代々継いでいくという文化があったようだ。職人の世界でも独り立ちするときに親方の一字をもらい、自分の名前を新たにするという文化があった。

徒弟奉公の完了を年季明けというが、その年季明けの祝儀は、親方が新しく独立する職人との結合を新しいかたちで強化するための、もつとも重要な機会となっていた。たとえば、輪島の塗師仲間では、年季明けの祝儀の席上で徒弟は親方との間に親子盃をかわし、親方の名の一字を貰い、その定紋のついた紋服・袴を着用して擬制的な親子関係の永続を誓った^{*32}。

しかし、三吉が「さんちき」を名乗ることは、こうした襲名とは大きく異なる側面がある。というのも、襲名には過去を引き継ぐという要素が色濃く表れているからだ。田中宣一は次のように述べている。

閉鎖的体系の社会では、過去に同じ名前を名乗った人々の特性が、多くの人に記憶されている。しばしば、その名がストックされるにいたった最初の保持者についての神話が語られていることもある。こういう場合、新たに命名された人は、過去の同名者の実績を重ねて認識されることになる。さらにいえば、同じ名前を名乗った祖先の靈魂が、名前を継いだ者の肉体に復活再生したのだと考えられてさえているのである。こうなると名前を負った人の、個としての人格発揮のチャンスは稀薄になり、周囲の者からは、過去の同名者のように生きることが期待されがちになるのである。個の性格よりも、名前じたいが人格の表徴だと考えられているのである^{*33}。

三吉の場合、田中の指摘するような襲名とは異なり、まだ何の過去も背負っていない名前を引き受けたのである。そこには神話はもちろん、過去の記憶もない。むしろ、それを作っていく存在こそ、「さんちき」自身にほかならない。この点において、三吉から「さんちき」への改名は、襲名とは異なる大きな転換点であったと言える。

さらに、出口顯は改名について以下のように述べている。

成人してあるいは病氣治療の一環として改名するような場合、古い名前を持つ自己と新しい名前を持つ自己は、決して同じ自己であるとはみなされていないケースがある。(中略) 生物学的に同一の個体に見えようとも、古い名前を持つ自己と新しい名前を持つ自分は、まったく別人とみなされるわけである³⁴。

つまり、「さんちきは、きつとウデのええ車大工になるで」とつぶやく三吉は、これまでの自分(＝三吉)と決別し、立派な車大工職人になるべく、まだ何のイメージもまとわりついていない「さんちき」としてのまったくさらな人生をスタートさせることを決意した、ということになるだろう。これからの人生をかけて、「さんちき」は自分自身の手で一から名大工「さんちき」の「神話」と「記憶」をつくりあげていくのだ。そのよりどころの一つが、親方とつくりあげたこの車である。「さんちき」にとって、この車はそれほど重要な意味をもつ存在なのであった。

三 炎上する京都

元治元年甲子五月二十日、三吉は「さんちき」という新たな名前のもと、気持ちを新たに修行に励んでいくことを決意した。そんな「さんちき」に、一体どのような未来が待ち受けているのか。史実を確認しながら、その後の「さんちき」について考察を深めたい。

まずは、車伝の所在地を大まかに特定しておこう。車伝は、一体どのあたりにあったのだろうか。「すぐちかく」に三条大橋があるということはわかるが、物語本文にはそれ以上のことは描かれていない。三条大橋(鴨川)の西側にあったのか、それとも東側にあったのか。

ここで西側について確認してみると、三条大橋の西側は中京区および下京区と呼ばれており、このあたりは祇園祭の山鉦を管理する山町、鉦町のある地域である。さらに、「下京は、中世以来、活気にあふれた商工業の町であった。この歴史的な伝統は、近世になっても途絶えることはなかった。いや、むしろ、市街地の拡大にしたがって諸職商の増大がみられ、バラエティに富んだ商工業の町をつくりあげていた^{*35}」とある。

また、当時の資料を確認してみると、侍の闇討ちは木屋町通り沿い、現在の中京区あたりで頻発していたことがわかる。車伝の目の前の通りで侍が斬られていたということから考えても、車伝はおそらく三条大橋の西側近辺にあったと考えてよいだろう。

幕末の京都は非常に物騒な状況にあったが、この三条大橋西側近辺はとりわけ治安の悪い地域であった。長州藩邸や土佐藩邸、池田屋や近江屋がこの付近にあることを考えれば容易に想像がつく。「つい三日前にも、すぐちかくの三条大橋で切りあいがあった」とあるとおり、攘夷派と佐幕派との争いが日常的に起きていたのである。

三吉が立派な車大工になると宣言した五月二十日以降、この地域の治安はますます悪化していく。六月五日には新撰組による尊王攘夷派襲撃事件、いわゆる池田屋事件が起きる。実は、この翌日、原因は不明だが、山鉦町付近の柳馬場蛸薬師周辺で火災が起きた。このときの火災によって、少なからず祇園祭も影響を受け、山鉦の出発を例年よりも遅らせることになったのだ。

三吉と親方の作った車が五月二十日に完成しているということは、そのデビューは元治元年の祇園祭であったと考えて良いだろう。火災による出発の遅れ。「さんちき」のつくった車は、のっけから憂き目に遭っていたのだ。

さらに、それから二ヶ月後、京都の町は大きな災禍にみまわれる。蛤御門の変が起きたのだ。このときの争いによって火の手が上がり、あつという間に京都の町は焼き尽くされてしまった。それはのちに元治の大火と呼ばれるほどの大きな火災であった。もちろん、この火災によって山鉦町も大きな被害を受けることとなった。しかも、これは天災ではなく人災である。その被害はどの程度であったのか。

七月十九日、禁門の変により京都は一面焼土と化す。この時も火は三日三晩燃えつづけ、山鉦町のすべてが罹災する。池田屋の事変ではなんらの支障をきたさなかった祇園会も、このどんと焼きで山鉦の多くを失い、翌年からの祭礼に大きな影響を蒙った^{*36}。

なんとほとんどの山鉦が燃えてしまったのだ。その結果、翌年以降、祇園祭はこれまでのようには開催することができなくなってしまっている。

元治元年（一八六四）七月の禁門の変により、罹災すること著しかった山鉦町は、引き続き維新の動乱にあって、山鉦復興に大きな努力を払わねばならなかった。大火翌年の慶応元年（一八六五）は、前祭に山鉦の巡行はなく、後祭もわずかに橋弁慶山・役行者山・鈴鹿山（唐櫃のみ）の山三基が巡行するという有様であった。その後も明治二年の函谷鉦の復興まで鉦の巡行はなく、数基の山が漸次巡行に加わっていったような状況が続いていたのである³⁷。

立派な車大工であることを証明してくれるはずの車、腕の良い車大工「さんちき」のよりどころであった車は、侍たちの争いによって、わずか二ヶ月後には燃えてしまうのだ。明治二年（一八六九）によりやく函谷鉦が復興するということは、罹災後、五年間は鉦の巡行は行われなかったことになる。

ようやく明治三年、長刀鉦、月鉦、鶏鉦が巡行に加わり、さらに明治五年の前祭には、長刀鉦・函谷鉦・月鉦・鶏鉦・放下鉦の鉦五基がそろい、山もほとんど復興して、後祭には、北観音山が加わるなど、前祭、後祭とも、ほぼ罹災前の姿となった。しかし、船鉦の復興には明治二十二年までまたねばならなかったのである³⁸。

「明治二十二年までまたねばならなかった」とあるが、これで完全に復興したということでもないようだ。傘鉦は一九八一年の時点において、「元治元年の大火で焼失、現在に至るまで中絶している³⁹」とある。ほかにも、二〇一〇年には、大船鉦の復興がニュースになっている。これらの事実を見る限り、その影響は計り知れないほど大きなものだったということがわかる。

特に「下京市街の罹災率は高く、約九十パーセント以上に達し⁴⁰」ており、三条大橋の西側一帯、つまり、車伝付近は焦土と化した。そうであるならば、親方とともにつくった車はおろか、「さんちき」が修行に励み、立派な車を次々に生み出していくはずだった車伝すら焼失してしまっている可能性が高い。

たしかに、歴史的な流れを見れば、山鉾の復興も着々となされており、京都の町の人々はめげることなく復興に励んだかのように見える。しかし、すべての人々がそうだったかと言えば、そんなことはないだろう。元治の大火が当時の人々に精神的なショックを与えなかったというわけではないはずだ。若山要助日記には、次のように記されている。

刻限ハ辰ノ刻、河原町三条長州屋敷ニ火の手上り候ニ付、上辺之町人男女雑具つゞら持運ひ、上を下へとかへし大混雜ニ相成、其中ニ大筒鉄炮の打合有^レ之。鎧武者の死人夥しく有^レ之。京中貴賤老若男女かまひすく泣き叫び、東西男(南)北ニ迷ひ廻り、誠ニ目もあてられぬ事共也⁴¹。

また、小出哲太郎氏所蔵文書には、次のように記されている。

申の刻より夜二いれと、提灯さへも取あへず、うろたへまわりて逃出す。其夜は何方にて寝るといふ積りもなく、唯あてとなしに逃行ける。(中略) 廿日昼後より又々山を越して在方へ逃行、少々宛の衣類の包飯ひつさらい、重病人年より八人の背におハし、こけつまるひつあとを見れば、子ハ親にはなれ、親ハ子を失る。さかしもとめる事もならず。病人産婦を戸板ニ乗せ、途中にて子をうむも有り死する者も有り。漸寺院の門前、宮の拝殿またハ百姓の軒ニむしろをかりて其夜を凌ぐ、こらへかたきハ食事にて用意とてもあらされは、やうやうひツに残りし冷飯を少、ツツわかち、其夜をしのぐ七月廿一日朝、漸々火鎮り、せめての事に灰かきして、少しの物をも掘おこさむと、家内皆々つれ立て我家の焼跡こ、ハ台所、爰ハ座鋪、こハ仏壇、爰ハたんす、此辺ハおし入と、焼^レ瓦をかきのけて掘ともく形ちもなし⁴²。

火災から逃れようとする人々の様子とその後の苦難が綴られている。こうした記録をふまえて考えたとき、災禍に見舞われた「さんちき」が、まったく何も感じなかったとは到底思えない。山鉾はもちろん、車伝すら燃えてしまっているかもしれないような状況下において、仮に親方やおかみさん、「さんちき」自身は助かったとしても、その心中は察するにあまりある。

思い返してみれば、三吉は斬られている侍を目撃しただけでも、おろおろとしてしまうような少年であった。そんな少年が、目の

前に広がる惨状とその後の焼け野原を目にしたとき、正気でいられたのであろうか。

ところで、車の完成からわずか二ヶ月後にこのような未来が待っているにもかかわらず、指導書では「考えを深める設問」として、次のように記されている。

三吉が将来、りっぱな車大工になって、自分が初めて作った矢を数十年ぶりに見たとしたら、どんなことを思うだろうか。そのときの三吉の心情を想像して書いてみよう。

なんともんきな質問のようにも受け取れるが、先にも述べたとおり、この物語を〈閉じられた世界〉として考えれば、この問いも成立するのも知れない。しかし、歴史的な時系列の中に位置づけたとたん、この問いはひどく滑稽なものにうつる。数十年どころか、わずか二ヶ月後にこの車はなくなってしまうのだから。

親方は侍を批判すると同時に、職人の仕事に勝るとも劣らない立派なものだと言っていた。しかし、よりによって「なにも残さんと死んでいく」と親方が批判していた侍たちの争いによって、「白くかがやいて」いた車は黒い灰と化してしまうのだ。しかも、明治維新以降、これもまた侍たちの手によって職人たちにとって不遇の時代がもたらされる。

もし、生徒に考えさせるのだとすれば、このような惨劇に見舞われた三吉が、その後、どうなっていくのか。彼の前にあるのは絶望か、それとも希望か。その点こそ、まさに「考えを深める設問」として問いかけるべきではなからうか。

四 ローソクのあかりを吹き消すということ

この物語は「三吉は仕事場においてローソクをともした」という一文で始まり、「それから、思いきり息をすいこんで、ローソクのあかりをひとふきで消した」という一文で幕を閉じる。指導書にも「明かりをつけるところから始まり、消すところで終わる作品」と指摘されているとおり、ローソクに始まって、ローソクに終わる物語となっているのだ。

ローソクが登場するのは、冒頭と結末ばかりではない。三吉が名前を彫っているところへ「なにしとるんや！」と親方が怒鳴って

現れたあの場面で三吉は、「『ローソクが、もつたいやないか！』とどなられそうな気がした」から、「あわててローソクのあかりをふきつけた」のだった。

この場面、よくよく考えてみると不自然ではないだろうか。三吉は、大事な車に自分の名前を彫っていたことに対してうしろめたさを感じていたはずだ。そうであるにもかかわらず、突然怒鳴られてローソクのことを心配するというのは、自然な反応とは言いがたい。もちろん、突然の大声に驚き混乱していたから、あるいは、親方のいる位置から三吉の手元は見えず、それが分かっていたから名前よりもローソクに意識が向いたのではないかと、といった解釈は成り立つ。

しかし、この場面が読者に何らかの解釈をゆだねなければならぬような、そんな不自然な場面であることに変わりはないだろう。しかも、これもまた不自然にも感じられるが、最後の最後、結末のところで親方は「はっはっはっ、さあ、もうねろ。ローソクがもつたいやないか」と口にしてている。ここへきて親方は、最初に三吉が心配していたローソクについての注意を与えるのだ。

このような展開をみると、ローソクに読者の注意が向くように仕組まれているかのようにすら思えてくる。そうだとすれば、ローソクに注目せずにこの物語を読むことは、何かを見落とすことになってしまうのではなからうか。そこで、この物語において、ローソクはどのように扱われていたのか。最後にこの点について考えてみたい。

ローソクの登場する場面を再度確認してみると、最初にローソクが登場するのは冒頭だ。「仕事場においてローソクをともした」三吉は鉾の車を見上げ、その荘厳な姿に見とれてため息をついている。ところが、名前を彫り始めてしばらくしたところで、起き出してきた親方に突然怒鳴られ、「三吉は、あわててローソクのあかりをふきけ」したのだった。

その後、親方の指示で再びローソクに火を灯した三吉は、不本意ながらも名前を彫り終えることができた。ところが、今度は車伝の目の前の通りで侍が斬られるという事件が起きる。このときは「外でどさつという音がし」たために、「ふたりはびくつと顔を見あわせ」、「親方がローソクをゆびさすと同時に、三吉がふきつけた」のだった。

このように、この物語では三吉にとって恐怖を感じるような場面でローソクの火が吹き消され、暗闇が訪れている。指導書でも「この作品において、闇は幕末の混沌とした物騒な世界を暗示するともいえる」と指摘されているとおり、ローソクのあかりが消えたあとの暗闇は、物騒な幕末京都の不穏な空気を象徴していると言っても良いだろう。たしかに、いずれの場面においても、暗闇は緊張感の高まる状況であったのだから。映画であれば、この闇には恐怖や不安を感じさせるBGMがよく似合う。

この点を無視して読み進めてしまうと「さんちきは、きつとウデのええ車大工になるで」とつぶやいてローソクの火を吹き消したとしても、読者の頭の中に浮かぶイメージの中ではその明かりは消えず、三吉の姿がまだ見えてしまうのではないだろうか。教科書『新編 新しい国語1』（二〇一六）の最後の挿絵には、ローソクのあかりの中で輝く三吉の姿がカラーで描かれているから、国語の授業中に読んでみると、なおさらこのようなイメージを抱いてしまいやすい。たしかに、この挿絵のようなイメージをもってしまうと、明るいハッピーエンドに思えてしまうだろう。

しかし、実際のところはそうではない。ローソクの火は消え、再びあの暗闇が訪れたところでこの物語は幕を閉じているのだ。歴史的事実ばかりではなく、ローソクの使われ方、明暗の使い分けに目を向けてみても、やはり「さんちき」に幸せな未来が待っているとは言い切れないところがあるのだ。

ローソクが伏線だったとまでは言はないが、最後に「さんちき」がローソクのあかりを吹き消したあと、京都の町は暗闇の喚起するイメージのとおり、未曾有の人災にみまわれる。こうした歴史的事実を念頭において、物語の締めくくりとなる最後の一文でローソクのあかりが吹き消されたという事実に着目すると、「さんちき」の未来が明るいものとなるのかどうか、ますます懐疑的にならざるを得ない。

さて、ここまで述べてきたことを理解してもらったところで、生徒たちにはぜひ考えてもらいたい。「さんちき」の未来は一体どうなるのか。もし、あなたが三吉／「さんちき」と同じ立場だったら、どう振るまうか。幕末同様、先行き不透明な時代を生き抜いていかなければならないのだとすれば、この点こそ、生徒一人ひとりに考えさせるべき設問と言えるのではないだろうか。

- *1 渡邊美雄「文学テクストが国語教室にもたらすもの」(『日本文学』二〇〇〇年三月)
- *2 吉橋通夫『京のかざぐるま』日本標準、二〇〇七年六月。
- *3 徒弟制は江戸時代において制度としての広まりをみせたが、誰でも弟子になれるというわけではなかったようだ。この点について、遠藤元男は「徒弟は雇用労働力であるから、親方―徒弟間の結合は契約によって成立するものであった。徒弟として弟子入りを許されるものは、一般の奉公人の場合と同様に、まず賤民でないことと犯過者でないことが、重要な条件として要求され(『日本職人史の研究Ⅰ 日本職人史序説』雄山閣、一九八五年一月、一四二頁。)」たと指摘している。
- *4 遠藤元男『日本職人史の研究Ⅵ 日本職人史百話』雄山閣、一九八五年二月、三〇五頁。
- *5 遠藤元男『日本職人史の研究Ⅴ 建築・金工職人史話』雄山閣、一九八五年九月、一一〇頁。
- *6 NHK連続テレビ小説『おしん』第5話参照。
- *7 遠藤元男『日本職人史の研究Ⅳ 職人と生活文化』雄山閣、一九八五年七月、四九頁。
- *8 前掲7、四八頁。
- *9 前掲7、五一頁。
- *10 前掲7、四六頁。
- *11 『松翁道話』(岩波書店、一九三六年一月、三五頁)には、十八世紀終わり頃の弟子の過酷さを示すエピソードが記されている。「或所に大工殿がある。其弟子を仕込ましやる、厳しいものぢや。昼は仕事先一日働き、暮に戻れば、水を汲み、風呂を焚き、夜食を仕廻ふと、四ッ過まで夜業さす。朝もとうから起きて、めし炊いたり、掃除仕廻うて仕事に行く。内の息子殿は、けふは頭痛がするというは休み、腹が痛むというは休み、近所の医者殿に見せる」
- *12 弟子の義務について遠藤元男は以下のように述べている。「徒弟は忠実・勤勉に技術の習得にはげみ、その秘密を保持することが何よりも要請されるが、そのほかに、親方の家族の一員として住込みであったから、終日を家事労働(水汲み・飯炊き・庭掃き・風呂焚き・使走り・子守りなどの雑役)にも従事させられた。また、親方に無断で暇取・欠落することは堅く禁じられ、奉公期間中に暇をとったものに対して、請人(保証人)から一カ月幾らの飯料を弁償させたり、さらに「何某義行状よろしからず、よって今般当家より……」という回状を仲間へ廻して、ほかの親方のところで雇用させない申合せが、輪島の塗師仲間ではあった(『輪島町史』)。そして、徒弟は無断ではかの親方のもとで働くことは禁止されていて、たとえ一日の臨時雇いであっても、親方相互間の了解を必要としていた。」(『日本職人史の研究Ⅰ 日本職人史序説』雄山閣、一九八五年一月、一四四頁―一四五頁。)
- *13 前掲5、六一頁。
- *14 若林喜三郎編『輪島町史』輪島町役場、一九五四年三月、四九四頁。
- *15 前掲5、一一一頁。
- *16 遠藤元男『日本職人史の研究Ⅰ 日本職人史序説』雄山閣、一九八五年一月、四三頁。
- *17 乙竹岩造『日本庶民教育史中巻』目黒書店、一九二九年九月、三九八頁。

- *18 前掲7、四三頁。
- *19 前掲17、六一二頁。
- *20 海後勝雄・廣岡亮藏『近代教育史(Ⅰ)』誠文堂新光社、一九五二年九月、三二〇頁―三二二頁。
- *21 網野善彦『日本の歴史をよみなおす』筑摩書房、二〇〇五年七月、三六頁―三七頁。
- *22 前掲7、四七頁。
- *23 前掲7、四七頁。
- *24 前掲16、一四七頁―一四八頁。
- *25 遠藤元男『日本職人史の研究Ⅲ 近世職人の世界』雄山閣、一九八五年六月、九五頁。
- *26 前掲16、一四八頁。
- *27 前掲7、五五頁。
- *28 前掲7、五五頁。
- *29 『世界大百科事典』平凡社参照。
- *30 本名に「三」が付くということは、貧しい家の三男ということなのかもしれない。
- *31 市村弘正『増補「名付け」の精神史』平凡社、二〇一三年八月、一四四頁。
- *32 前掲16、一四五頁―一四六頁。
- *33 田中宣一『名づけの民俗学』吉川弘文館、二〇一四年三月、一三八頁。
- *34 出口顯『名前のアルケオロジー』紀伊國屋書店、一九九五年九月、一九二頁―一九三頁。
- *35 京都市『史料 京都の歴史 第十二巻 下京区』平凡社、一九八一年二月、四四頁。
- *36 祇園祭編纂委員会・祇園祭山鉾連合会編『祇園祭』筑摩書房、一九七六年六月、二八頁。
- *37 前掲36に同じ。
- *38 前掲36、二九頁。
- *39 前掲35、一〇五頁。
- *40 京都市『史料 京都の歴史 第四巻 市街・生業』平凡社、一九八一年一月、五五五頁。
- *41 京都市『史料 京都の歴史 第五巻 社会・文化』平凡社、一九八四年三月、五二五頁。
- *42 『幕末京都図巻』京都市歴史資料館所蔵。

なお、本文の引用は吉橋通夫「さんちき」(『京のかざぐるま』岩崎書店、一九八八年六月所収)によった。